

紅葉台



新聞

第60号

2023年

1月14日

発行人：関谷 孝

「犬」について (辞書の話)

関 邦義



「辞書は引くものではなく、読むものである」と言ったのは、確か三島由紀夫だったと記憶している。中学生の頃から親しんでいる『新選国語辞典』(小学館)の新版(第十版)が、11年ぶりに2022年の春出版されたので買わなければと思っていたのだが、先日になってようやく購入した。

それで、さっそく前から気になっていた「犬」を引いてみた。時代劇などを見ていると、時々「犬死に」などという台詞が出てきて、おおよその見当はつくものの、なぜ「犬」なのかと訝しく思ったりしたものだ。他にも「犬蓼(いぬたで)」とか「犬黄楊(いぬつげ)」とかあって、犬好きの「犬派」としては、「犬」が不当に扱われている気がして今ひとつ納得しなかったからである。

念のためもう一つ、「日本でいちばん売れている小型国語辞典」と銘打たれている『新明解国語辞典』(三省堂)も調べてみた。一応「なるほど」とは思うものの、この辞書の解説は、ちょっとひど過ぎないだろうか。ただ、他の辞書の説明では、一体なぜ「いやしい。あさましい。」の意なのか判然としないが、流石に『新明解国語辞典』では、よくわかるようになってきている。

それにしても、**㊦** **㊧**の説明は、とうてい承服しがたい。なぜなら、**㊦**の説明で「従順なので家・ヒツジなどの番をしたり嗅覚が鋭いので狩猟・犯人の捜査に協力したり目や耳の不自由な人を導いたりする。」とあるのだから、十分人間の役にたっており、**㊦** **㊧**の説明と矛盾するのではないだろうか。おそらくこの辞書の執筆者は、そのことに気づいたので、取ってつけたかのように「主人や主家の家族によく懐(ナツ)き、時に生命を保護してくれる意味では有用だが」と付け加えたのだらうと推測される。

それから、「相手構わず…」の件(くだり)だが、私の観察によれば、「犬」なりに雄・雌ともに相手をクンクンと嗅ぎまわり、入念に確認吟味品定めし、選り好みしているように思われる。時に吠えかかったりもするのだから、全く犬に対する偏見も甚だしい限りだ。

○『新選国語辞典』(小学館・第十版:2022.2 発行)

いぬ【犬】**㊦**名 ①イヌ科の哺乳類。嗅覚・聴覚が鋭い。もっとも古くから飼われ、種類が多い。狩猟・警察・救護・盲導・愛がん用など。②まわしもの。スパイ。**㊧**[造][名詞につく]①似てはいるが、別物であることを示す。「— アカシア」。②いやしい。あさましい。「— ぎむらい」。③むだ。役にたたない。「— 死に」。

○『新明解国語辞典』(三省堂・第八版:2020.11 発行)

いぬ【犬】**㊦**大昔から人間に飼育されてきた家畜。従順なので家・ヒツジなどの番をしたり嗅覚が鋭いので狩猟・犯人の捜査に協力したり目や耳の不自由な人を導いたりする。

[イヌ科]「— を飼う/夫婦げんかは— も食わない/警察の— [=スパイ]/権力の— [=自分の立身出世と地位の安定を願い、上司の命令を忠実に聞く人]」。

㊦(造語)**㊧**役に立つ特定の植物に形態上は似ているが、多くは人間生活に直接有用ではないものであることを表す。にせ。「— タデ・— ツゲ」**㊧**[主人や主家の家族によく懐(ナツ)き、時に生命を保護してくれる意味では有用だが、牛馬に比べてからだも小さく生産性が少ないと見られたり相手構わず交尾したりするところから]「役に立たない」「恥を知らない」という意を表す。「— 死(ジ)に」「— 侍(ザムライ)」。

なお、小学館の『新選国語辞典』だが、語義の説明がオーソドックスなのに加えて、図版が豊富な点が入っている。小型辞典で10版を数えるのは、他に旺文社の『国語辞典』(第11版)があるぐらいだ。もちろん、何と言っても読んで面白いのは三省堂の『新明解辞典』である。ただし、図版はない。

粕谷和夫の観察日記

ヘラサギ



伊豆沼と並んで夜のねぐらに利用している蕪栗沼にヘラサギという珍しいサギが3羽いました。嘴の先が「へら」状になっています。下の写真は、魚を捉えて顔を上げた瞬間です。(拡大して見てください)

♥ 嘴がしゃもじのようになっているのが特徴の鳥ですね。日本には数羽しか来ないようなので、これもとても貴重な鳥だと思います。魚を捕まえた瞬間をナイスショットです。思った以上に大きな魚をくわえています。うまく呑み込めたのでしょうか。それにしてもなんでこんな変わった嘴をしているのでしょうか。魚を追い立てるのに便利なのでしょうか。



カリガネ

マガンの群れの中にカリガネという珍しいガンも混じっていました。眼の周りが黄色い(黄色いアイリング)のがカリガネです。4羽のうち、3羽がカリガネで、真ん中の眼が黒い1羽がマガンです。

♥ ちょっと見では区別が付きにくいですね。カリガネは絶滅危惧種になっているようです。日本では若干増えています。それでも300羽だそう。世界的には激減しています。とても貴重な鳥ですね。写真をよく見ると黄色いアイリングが識別できます。山階鳥類研究所では、1羽のカリガネに発信機を付けて調査をしているとネットに出ていました。

会長さんは毎年伊豆沼で観察をしています。